沖にちょっと移った海岸線～稲毛海岸の第一期埋立～

約60年前、ギャラリー・いなげの目の前は海でした。稲毛の街には海水浴、潮干狩り、海苔養殖など海の様々な記憶があります。1961年（昭和36年）、稲毛海岸では埋立事業が始まり、今では海岸線は沖に向かって約2.7km先まで移動しています。今回は2回に分けて埋立てられた稲毛海岸の「第一期埋立」について、地域の方のお話を基にご紹介します。

②手前は公務員団地、稲岸公園を挟んで奥が稲毛海岸三丁目団地

①稲毛プールセンターと「プール団地」と呼ばれた右奥の稲毛団地

憧れの団地生活

第一期の埋立は、沖に約400mと実験的な範囲でした。埋立に使う大量の土砂はどうしたか？意外にも近くの沖の海底の砂を、海上に張り巡らせたパイプで運び、土地を造成したそうです。こうして戦後初めてできた市内最初の埋立地が「稲毛海岸」地区です。子ども時代稲毛在住だった藤川さんは、まだ何もない広大な埋立地でよく野球をしたそうです。土の質か水の影響か、足がズボッとはまってしまうことがあったそうです。

高度経済成長期に急速に進んだ集合住宅建設の波に乗り、稲毛海岸にも昭和43年にはすでに3つの団地が完成していました。寝食の空間を分けた近代的な「団地生活」は当時憧れの的で、稲毛にも全国から若い夫婦や家族が引越してきました。都内から稲毛団地に移り住んだ自治会長の鈴木さんもそのお一人。昔ながらの下宿生活から、シャワートイレ別、最新のダイニングキッチン付の団地暮らしに心踊ったそうです。

③岸部の壁と土砂を運ぶ鉄管

④できたばかりの稲毛海岸三丁目団地

自分たちでつくる街

ですが、夢の団地生活も最初からすべてが整っていた訳ではなかったようです。住居こそあれど、環境整備はまだまだ、さらに住民は赤の他人同士。そこで、まず自治会の編成から始まり、親睦を深めるための婦人会・子ども会、さらに見知らぬ土地で暮らすお年寄りの心細さ・不便さを支えるための老人会など、どこの団地でも地域を支えるコミュニティを一から作りました。

また、新しい街には伝統行事もないので、夏祭りなどの年中行事も、各団地で工夫を凝らして企画されて、今でも熱心に続いています。

⑦お揃いの帽子の子ども会

⑤三丁目団地の夏祭り。自慢の神輿が登場

⑥三丁目団地老人会「さつき会」稲岸公園にて

住んでみて初めてわかる課題もありました。例えば午前3時の牛乳配達で、箱に大量に積まれて配達されるガラス瓶のぶつかる音で子供が起きてしまう集合住宅ならではの「牛乳騒音」。稲毛団地では、敷地内にミルクセンターを造り、配達を一か所に集約させて見事解決！また、当時は最寄り駅のJR稲毛駅に直結する稲毛陸橋がなく、車の無い世帯にとっては、通勤通学が大変不便でした。そこで、各団地では敷地内にバス停をつくり、稲毛駅や幕張駅方面の路線に組み込んでもらう等、暮らす中で工夫を凝らしていきました。

子どもたちの遊び場

さて、その頃団地の子供たちは？最初、学校は稲毛第二小学校と稲浜中学校の2校のみ。新しい団地が建つたびに一斉に転校生を受け入れていたため、教室不足でプレハブ校舎で学んだ子も多かったようです。

稲毛海岸地区には、稲毛プールセンター（数年で水が枯れて？閉園）や海洋公民館こじま（詳細は海気通信9号）、釣り堀、廃車のポンコツカーを走らせるリアル？ゴーカートなどが点在。当時はまだ埋立地先で潮干狩りや釣りもできたので、子供に混ざって大人もハゼを釣って天ぷらにしてビールのつまみに！なんてこともあったようです。

さよならオーシャンビュー

団地の窓から東京湾を一望できたのも束の間、昭和44年には稲毛海岸の第二期埋立がスタートします。そのお話はまたの機会に。

⑧稲毛プールセンター、松田さん親子

⑨海辺なのに淡水魚の釣り堀のんき

今回は、稲毛三丁目団地元自治会長・長倉祐作氏、稲毛団地自治会長・鈴木重夫氏、植草昭教氏、藤川正男氏のお話を元に編集しました。写真ご提供は①「稲毛団地50年の歩み」②齋藤りつ子氏、③千葉市立郷土博物館④～⑦「稲毛海岸三丁目団地20周年記念誌いなぎし」⑧松田美津江氏、⑨植草昭教氏。どうもありがとうございました。

海気通信

16号
2019/10/10
発行
千葉市民ギャラリー・いなげ

〒263-0034
千葉市稲毛区稲毛1-8-35
TEL:043-248-8723
FAX:043-242-0729
https://galleryinage.wordpress.com

＊バックナンバーをダウンロードできます。